

次の半世紀に託すこと

高橋 龍三郎

考古学は、人類の歴史を扱うと同時に文化・社会を扱うという意味で、やはり人文科学である。縄文時代の学史を振り返ってみると、事象の因果関係と影響関係を正しく歴史の中に位置づける必要から、まずは土器の型式編年研究が優先された。昭和10年代にかけて基本的方法論が整えられた「ミネルヴァ論争」はその時代を象徴すると言ってよいだろう。同じ頃、「ひだびと論争」が起こり、編年研究の必要性和並行して文化・社会、経済領域の必要性が主張された。私は学史上、両論争とも重要だと考えている。

論争から90年が経ち、縄文考古学はどこまで進展したであろうか。編年研究は進展して精密さを増し、細別土器型式の実態が明らかにされ全国的な広域編年網が整えられてきた。年代と地域の日盛りは愈々細くなってきたといつてよい。しかし、縄文社会はどこまで解明されたのか。部族社会の構造や親族構造、婚姻制度、出自制度などが遺跡や遺構、遺物にどのように反映しているのか、社会の複雑化、階層化過程が縄文時代を通じてどのように把握されるのか。これについては20年ほどの研究の厚みしかなく、長い目でみると、まだ解明の緒についたばかりである。

考古学では遺跡、遺構、遺物などの物質文化の研究を通じて社会に接近する他に道はない。その装備は万全であろうか。資料の増加を待っていれば、それで解答が得られるというものでもない。考古資料は沈黙資料だから、結局それに口を開かせるのは研究者自身の技量である。しかし、考古学の知識と技術だけでは到底その領域をカバーしきれものではない。おのずから隣接分野の支援を仰がざるを得ないし、自らも研究する努力が必要である。人類学者や民族学者が考古学のためにそれをやってくれることはないからだ。また人類学者の関心事が考古学者の関心事が重なるということもないだろう。だから考古学者自らが外向いて民族誌などを調査する他ないのである。

そのような時代背景のもと、私は学生たちと共に岩手県や千葉県の縄文遺跡を調査しながら、それに並行してパプアニューギニア民族誌調査を20年近く継続した。パプアニューギニアの調査は土器型式成立の社会的背景を理論的に探ることが目的であったが、縄文社会研究に役立つ多くの情報が手に入った。大学院生たちと共に仕事できたことは私の一生の誇りである。昨夏、『パプアニューギニア民族誌と縄文社会』（同成社）を上辞することが出来たことは、その研究成果の公表でもあったが、私にとっては一つのけじめであり、学界の縄文社会研究に向けた提言でもあった。一つの研究成果をまとめるのは時間がかかるものである。

大学院考古学コースは1976年に開設以来、まもなく満50周年を迎える。早いものである。発足当時、古代エジプト、西アジア、縄文時代、古墳時代を学ぶ8名の第一期生の一人として進学した。それから間もなく半世紀、どこまで縄文社会の研究を進めることが出来たか、と自ら問うてみるが、もちろん道半ばである。

『溯航』は今号で第42号を迎える。5名の執筆者が各分野で健筆を振るう。継続は力なり。成果を積み上げる努力の延長が42号に繋がっている。今までのご努力に敬意を表したい。

これからの新たな時代、若い人たちが高邁な理念のもとで活躍する場面が増えるだろう。先生方と共に各方面で頑張ってもらいたい。若い人の努力と創造力に大いに期待したいと思う。